

成長する 町営バスへ

「生活交通」という言葉がある。わたしたちが日常生活の中で利用している公共交通機関のことをいう。通勤・通学・通院・買い物などで利用する、鉄道・乗り合いバス・タクシーなどのことだ。

町営バスという、この町に無くてはならない生活交通。その課題について考える時、町の人の意見は欠かせない。実際に、ここで生活する人でなければ、この地域に本当に必要なものは見えてはこないからだ。9ページの下欄に紹介した「フリー乗降サービス」も、地域の人の声から生まれたサービスの一つだ。

新規路線がスタートした今だからこそ、確認しておきたいことがある。

町営バスの明日を守るため、 今、わたしたちにできること

南部路線の利用者数は年々減少し、収益も下降線をたどっているという現実だ。北部路線であっても、同じ道を歩む可能性はある。

町営バスを存続させるために投入される町の予算（税金）は、毎年積み重なってゆく。少しでも減らしていくためには、行政の努力だけでは足りない。バスは住民みんなの力を必要としている。

今、わたしたち一人一人にできること。それは、町営バスを支えるために何が必要なのか、みんなで考えること。そのためには、実際にバスに乗ってみることだ。

「どの時間帯に集中して運行すれば需要を満たすことができるか」「どの地区にデマンド型を導入すれば、より多くの人が利用できるか」「町内の

どんな機関と連携すれば、効率的で利便性の高い運行ができるか……。一人一人の生の声が、バスを成長させるヒントとなるはずだ。

そしてそれは、町営バスが存続している「今」だからこそできることでもある。

石川県に廃線になった鉄道がある。能登町を走っていた「のと線」だ。地域の生活交通の中心を担っていたのと線。それがなくなり、町はどう変わったのだろうか。能登町の人に尋ねてみた。

「のと線は、通院や通学など、車を運転できない人たちが主に利用していました。しかし慢性的な赤字経営のため、やむなく廃線となりました。のと線が無くなり、今感じることとは、人の流れが変わってしまった」ということです。町にある高校には、町外から通う生徒が多くなりました。その子たちは、主にとと線を使って通学していました。のと線が無くなった今、生徒数は半減。高校は存続の危機に立たされています。これ

はほんの一例ですが、町にとっては大きな変化でした。廃線直後は、気が付きませんでした。しかし最近ようやく実感してきました。『のと線が町を支えていた』ということ。地域に欠かせない存在だったということ……。

特集の取材中、多くの人が口をそろえるように話していた。「町営バスは川根本町に無くてはならない存在なんです」と……能登と同じだ。でも、のと線はもう存在しないが、本町のバスは今も町を走っている。今、わたしたち一人一人が利用することで、バスを支えることができ

る。考えることで守っていくことができる。バスが成長するということは、考え続けるわたしたちも一緒に成長していくということだ。

この町の大切なバスのことだからこそ、今みんなの力で取り組みたい。「町営バスのあした」は、無くなってしまっただけから考えても、遅いのだから。

特集 バスのあした― 終

川根本町バス路線対策委員会 3月18日

3月18日に開かれた「川根本町バス路線対策委員会」を取材した。町営バス路線の充実と、さらなる利便性の追求のため、熱心な意見が飛び交う会議だ。この委員会は、官公庁などの職員で構成されている訳ではない。ほとんどの委員が、ごく普通の一住民だ。町営バスが住民の生活を支え、町の人がバスを守るために知恵を絞る。町営バスは、「住民参加」と「協働」の姿勢によって支えられている。



ある日の町営バスの車中にて。利用者の明るい笑顔と楽しげな声が響いていた。町営バスを利用することが、将来にわたって守り続けることにつながっていく。

【取材・協力】▶岩手県一戸町 久保田太一
▶石川県能登町 道下政利